

日本大学大学院商学研究科博士前期課程
一般入学試験（第1期）

外国語

注 意

- 1 試験開始の合図があるまで問題冊子を開かないでください。
- 2 試験開始の合図があったら、解答用紙に記載された専攻名などが出願内容と同じであるか確認してください。
- 3 この問題冊子は、全ての専攻・科目が一冊に綴じられています。出願書類に記載した専攻・科目とは異なる専攻・科目を解答しないように注意してください。
- 4 問題は、第1問と第2問があります。第1問と第2問の両方とも解答してください。
- 5 解答用紙は、第1問と第2問に分かれています。
- 6 解答用紙の所定欄に、受験番号と氏名・フリガナを必ず記入してください。
- 7 解答は、解答用紙に記入してください。
- 8 解答時間は90分です。
- 9 問題冊子と解答用紙は必ず提出してください。 ※持ち帰らないこと。

専攻名	受験番号	氏名（フリガナ）

※試験開始の合図があるまで記入しないでください。

商学専攻

英 語

商学専攻

第1問

次の英文を日本語に訳しなさい。

The widening trade surplus in China and the growing trade deficit in the United States since the pandemic have reignited discussions about global economic imbalances. Many concerns focus on whether China's surpluses stem from industrial policies aimed at boosting exports in response to weak domestic demand. However, a deeper macroeconomic perspective reveals that these trade balances are primarily influenced by domestic economic factors rather than just policy measures.

During the pandemic, China's trade surplus surged, initially driven by increased exports of medical equipment and shifts in consumer behavior toward goods over services. However, by late 2021, domestic demand weakened due to a property market correction and ongoing lockdowns, resulting in higher household savings and reduced investment. In contrast, the U.S. saw a surge in demand fueled by government spending and declining savings, leading to a deteriorating current account balance.

This scenario illustrates two key points: first, global real interest rates have risen, challenging the notion of a global savings glut; second, both countries' external balances are predominantly shaped by domestic conditions.

For China, it is crucial to implement structural reforms to address imbalances, particularly in the property sector and in light of an aging population. The U.S. also requires significant fiscal adjustments to improve its external balance.

Concerns regarding industrial policies persist, as China's extensive subsidies can lead to trade tensions and affect global competitiveness. Establishing effective multilateral rules and narrowing the focus of industrial policies are essential for maintaining fair competition. Addressing these underlying domestic issues will be critical for achieving sustainable economic balances in both nations and fostering a more stable global economic environment.

参考文献：

Pierre-Olivier Gourinchas, Ceyla Pazarbasioglu, Krishna Srinivasan, Rodrigo Valdés, 2024, "Trade Balances in China and the US Are Largely Driven by Domestic Macro Forces: Worries that China's external surpluses result from industrial policies reflect an incomplete view" IMF Blog, 2024.9.12.

<https://www.imf.org/en/Blogs/Articles/2024/09/12/trade-balances-in-china-and-the-us-are-largely-driven-by-domestic-macro-forces> Accessed 2024.10.07

商学専攻

第2問

以下の英文を日本語に訳しなさい。

In fact, capitalism is a bit like Schumpeter himself: bold and vital, fizzing with new ideas, never at rest. Underneath Schumpeter's surface of sparkle and wit, however, was a troubled mind, and in the capitalism that he tried to understand he perceived a dark side. 'Can capitalism survive?' Schumpeter asks. 'No. I do not think it can.'

Capitalism's liveliness contains seeds of gloom that will destroy it. To explain why, Schumpeter did something unusual for an economist. He made an argument about the politics and culture of capitalist society, not its economics. Karl Marx explained why capitalism was doomed in terms of economics: as the capitalists take more and more of what's produced as profit, the workers get less and less until the whole system shatters. For Schumpeter, however, there was no problem with the economy of capitalism. The problem was in the effect that capitalism has on people's broader attitudes, especially when firms get bigger. When entrepreneurs are successful, firms grow. Eventually giant corporations appear. They use advanced technologies to spray out new goods. Innovation can then be carried out using rational methods, often in specialised company research departments. Think of one of today's big companies, such as Apple. It has various research teams: some produce new software, some develop faster and lighter iPhones, others create more powerful laptops. What used to be visualised in a flash of genius by an entrepreneur now gets done using tried and tested procedures. Economic progress becomes automated in company policies and committee meetings.

(出所)

Niall Kishtainy (2017) *A Little History of Economics*, Yale University Press, p.113

Reproduced with permission of the Licensor through PLSclear.

経営学専攻

実施なし

英 語

会計学専攻

実施なし

英 語

商学・経営学・会計学専攻（共通）

日 本 語

商学・経営学・会計学専攻（共通）

第1問

以下の文章を読み、設問に答えなさい。

（出所：高根正昭『創造の方法学』（講談社現代新書）講談社、1979年。出題の関係上一部加工してあります。）

この部分は著作権の都合上、
公開できません。

問1 文中の下線部①の意味するところを論じなさい。

問2 文中の下線部②は、どのようなことを意味しているのか論じなさい。

商学・経営学・会計学専攻 (共通)

第2問

次の文章を読み以下の設問に答えなさい。

さて、この本で私たちがみていくのは、おもに自然科学における思考実験です。そして私たちが「自然科学」というとき、長きにわたってそれは西欧近代科学のことでした。では、それはどのように特徴づけられる科学でしょうか。まず、そのことをあらためて確認しておきましょう。多くの人が挙げている西欧近代科学の特徴としては、次の4つがあります。

(1) 普遍的な因果法則を求める
(2) 合理的であり、実証的である

(3) 要素還元論的である

(4) 主体と客体という図式の世界認識

じつはこれらの特徴こそ、いわゆる機械論的な自然観に偏った科学技術を生み出した元凶ともいわれているわけですが、それはさておき、これらの特徴をもう少し詳しくわしくみていきます。

まず重要なのは、(1) 普遍的な因果法則の追究でしょう。「普遍的」というためには、その法則は、いどこで誰が観察しても、どんな条件でも同じことが起こらなければなりません。そして当然、実験によつて再現可能でなければなりません。また、原因と結果は、説明可能なメカニズムによる因果関係の連鎖でつながっていることが求められます(ただし「因果関係」は、単なる「相関関係」とは異なるので注意が必要です。これについてはのちほど)。

(2) の合理的で実証的であるという特徴は、17世紀の科学革命期に活躍した物理学者ガリレオ・ガリレイ(1564~1642)と、哲学者フランシス・ベーコン(1561~1626)の精神であるとよくいわれます。ガリレオは自然科学の方法論の原型を確立した人で、問題を分解して、実験し、法則を数量的に表しました。自然は「神の書物」だから、人間にも理解可能であるという信念をもっていました。また、ベーコンは、自然世界は迷宮のようなものだが、それを理解するための方法論は、人間界の法廷での判定のようではなくてはならないとしました。それ以前の魔術や超自然による説明を排して、論証し、対話して、陪審員裁判の精神で自然の解明に当たるべきだとしたのです。

(3) 要素還元論とは、対象や問題を、部分や階層に分解して、それぞれの部分を解明すれば、それらを合成・総合することにより全体がわかるであろうという考えです。

その根底にあるのは、現象や世界は階層に分けることができるという、世界の理解・整理法です。たとえば物理↓化学↓生物↓人間↓社会というように自然界の階層は下降していき、それぞれの階層には独自の法則が存在していて、上の階層の法則から下の階層の法則が導かれるという考え方です。そして最上階の法則こそが、統一的で普遍的な因果法則だというわけです。自然界をこのようになしかたで認識するのは、(西欧近代科学の徒である)われわれ人類の認識法の癖なのが、

それとも、そもそも自然とはそういう性質をもっているものなのかは、大きなテーマといえます。ものごとは要素に切り分けられるという発想は、実験という営みの本質でもあります。検証すべき法則だけを問題にできる設定にすることができると考えているのです。

ここまでの3つの特徴は比較的わかりやすかったと思いますが、(4) 主体と客体という図式の世界認識とは、とっつきにくい言葉です。これはどういうことでしょうか。

話をここで(1)に戻します。自然界に普遍的な因果法則を見いだしたがるという心性は、とくにキリスト教に由来するものと考えられます。神は世界を創造され、そこに法則を置かれた、それはいかなる意図によるものかを読み解きたいという考えです。

「天と地を産み出した全知全能の創造主は、2冊の最も重要な書物を我々の目の前に差し出された。1冊は自然という書物であり、もう1冊は聖書である」

17世紀の科学革命の頃からこういう考えが主張され、自然の研究をすることは神の意図を読み解くことになると考えられました。ここから「主体」と「客体」という図式が出てきたといえるでしょう。対象を観察して認識する「主体」と、観察される「客体」とを分離し、自己という主体を世界の外側に置いて、世界を客体として理解しようとするのです。これはやはり、キリスト教の精神といえます。

ただし、神が置かれた法則、たとえばニュートンの運動方程式は物理学の研究対象になります。その方程式で可能な解はたくさんあるなかで、なぜ特定の解だけが選ばれてこの世界に実現しているのか、なぜほかの解ではなかったのかは、物理学では扱いません。科学が扱うのは法則そのものであり、それ以前の初期条件に類することは「神の気まぐれ」とみなして、扱わないのです(ただし宇宙論では、宇宙がなぜこのような宇宙であったか、ほかの宇宙ではないのかという問題も21世紀に入ってから盛んに扱われるようになり、たとえば「人間原理」と呼ばれている考え方もあります)。

いずれにせよ西欧近代科学においては、人間が「主体」となって自然という「客体」の普遍的因果法則を追究することが「神の御心」にかなうと考えられてきました。したがって、その法則を用いて世界のあり方や未来を推測し、地球の資源を利用し、あるいはもっと積極的に自然を制御し、改変することも、人間に対して神が命じられたことであると正当化されてきたのです。

少し長くなってしまいましたが、自然科学における思考実験の舞台となってきた西欧近代科学とはどのようなものかを紹介しました。では、ここでは普遍的な法則や原理を自然界に見いだすために、どのような方法がとられてきたのでしょうか。

設問1 西洋近代科学ではなぜ「主体」と「客体」という図式が生まれたのかを説明せよ。

設問2 本文で述べられている西洋近代科学の特徴を簡潔に述べよ。